

日本語を歌・唄・謡う
— 共通の歌詞をうたい分けた音声試料の紹介 —

中山 一郎

大阪芸術大学芸術学部音楽学科
〒 585-8555 大阪府南河内郡河南町東山 469
E-mail: nkym@osaka-geidai.ac.jp

あらまし: 本稿は、共通の歌詞（共通詞）を、邦楽と洋楽の演者たちが自由に“歌・唄・謡い分け”を行った、日本語の歌唱に関する音声試料の紹介である。

日本語を洋楽的唱法で歌唱する場合、日本語のニュアンスや自然さが失われ、その結果として、“何を言っているのか解らない”ことがしばしば起こる。その克服には先ず、古来、日本語の扱いに工夫をこらして発展してきた伝統芸能(邦楽)との歌唱表現法の比較が不可欠であると考えられるが、そのための音声試料が存在していない。

そこで本研究では、両者の比較が容易なように、歌詞を共通にして、多数の人間国宝を含む邦楽と洋楽の最高クラスの演者たちに、それぞれのジャンルでの典型的な歌唱表現法で、この共通詞を自由に“うたい分け”てもらい、それらを収録した。

本稿では、得られた音声試料について、事例も示しながら紹介する。

キーワード: 日本語の歌唱、共通詞、邦楽の歌唱、洋楽の歌唱、歌唱表現法、音声試料

An introduction of vocal samples sung by Japanese traditional and western classical-style singing, using a common verse

Ichiro NAKAYAMA

Department of Musicology, Osaka University of Arts
469, Higashiyama, Kanan-cho, Minamikawachi-gun, Osaka, 585-8555 Japan
E-mail: nkym@osaka-geidai.ac.jp

Abstract: This article is the introduction of vocal samples sung by Japanese traditional and western classical-style singing, using a common verse.

When the Japanese language is sung in western classical-style, the natural qualities and nuances are frequently lost and the lyrics may be difficult to comprehend. In order to resolve the problems, an important first step would be to examine Japanese traditional singing, with its rich linguistic historical and cultural base, and then compare it to western-style vocalization. There is, however, no such vocal sample as to be able to compare these two singing styles.

In the present study, a common verse is sung by a number of professional artists with high grade, through which the typical vocal expressions in various traditional Japanese arts will be elucidated and compared to a western approach.

Key words: singing in Japanese, common verse, Japanese traditional singing, western classical-style singing, vocal expressions, vocal samples

1. 研究の背景と目的

ソプラノ（洋楽的唱法の意）が歌う「日本語」に、少なからず違和感を感じている[1-3]。声の“響き”はそれはそれで美しいのだが、それを優先する余り、コトバの明瞭さや「日本語」としてのニュアンスが失われ、その結果、“何を言っているのか解らない”ことが屢々である。この違和感の背景には、洋楽的唱法という異文化を、恐らくは西欧に対する劣等感ゆえに無批判的に輸入してしまった、明治初期の洋楽受容についてのこの国の不幸な歴史があり、加えて、日本語の特質や、我々の祖先が培ってきた歌唱表現のアイデンティティーを考慮にいれた歌唱法の研究・実践[4-6]が、これまで全く不十分にしか行われてこなかったことがあるものと考えられる。

そこで、「どのようにして洋楽的唱法で日本語を歌うのか?」、というテーマに取り組むことになったが、それには先ず、古来、日本語の扱いに工夫をこらして発展してきた伝統芸能（広義の邦楽）に着目して、そこでの歌唱表現法（声質・音色、歌詞の当てはめや音の移行法、間やリズムの取り方など）と洋楽のそれとの比較研究が不可欠、と考えた。ところが、それを行うための音声試料が存在していないのである。

凡そ何かを比較するためには、少なくともある要素（ここでは歌詞）を共通にして、一貫した方針に基づいて系統的に発声された、高品質の音声試料が多数必要であるが、そのような音声試料は全く存在していない。無論、これまでも邦楽の各ジャンルの音が聴けるレコードやカセット・CDブック等は数多く公開（市販）されてはいるが、各ジャンルの演目がそれぞれ異なるが故に今回の比較研究の対象にはなり得ない。また、邦楽と洋楽の比較という視点は、それらには初めから無い。そこで、音声試料の収録から始めることにした。

本稿においては、筆者が約4年間に渡って収録してきた、共通の歌詞（共通詞）を、邦楽と洋楽の最高クラスの演者（発声者）たちが自由に“うたい分け”を行った音声試料について、実例も示しながら紹介する。

2. 音声収録

今回の音声収録の方法は、1) 歌詞を／かえでいろづく やまのあさは(楓色づく 山の朝は)／（作詞：上嶋 力(共同研究者)）に統一して（共通詞）、2) 邦楽と洋楽の最高クラスの発声者たちに、それぞれのジャンルでの典型的な歌唱表現法で、この共通詞を全く自由に“歌・唄・謡い分け”（様式、心情、場面、登場人物などの別）でもらう、という方法である。即ち、この詞に幾通りにも自由にフシ付けする、いわゆる自由創作である。この詞を選んだ理由は、1) 5母音が含まれていること、2) 音声の音色の比較が容易なように、同じ母音が子音を挟んで現れること（ここでは、/yamanoasawa/の/a/)、3) 多様な歌唱表現が可能ないように、曲のイメージが限定されにくいこと、による。

音声収録は、1) 共通詞の“うたい分け”（声だけの場合と、伴奏（手）を伴う時には手も付けた場合の二通り）は無論のこと、2) 共通詞以外の、各自の得意な曲も数分間づつ、また、3) 5母音（歌声と話声の二通り）についても行った。なお、発声音高やテンポ、強さなどは発声者の全くの自由とした。

収録は無響室内で、録音系（ステレオ）の周波数特性を平坦に保って行った。その際、一つのチャンネル（L）は必ず発声者の正面に割り当てられ、この音声は音声分析、及び「音声データ・ベース」構築の際の音源になる。なお、警女唄の1例だけは、発声者が高齢のため無響室の使用は不可であり、従って住居内の和室で収録した。

3. 発声者

現在までに、邦楽の殆ど全てのジャンル（人間国宝16名を含む60名）と洋楽（12名）の、各ジャンルにおける最高クラスの発声者72名の音声収録を行った。収録時間は延べ約100時間である。各ジャンルの発声者数（括弧内）は次の通りであり、発声者名を表-1に掲げる（演歌～アナウンサーも邦楽に含めてある）。

/邦楽/ 古代・中世歌謡(1)、祝詞(1)、声明(8)、能(3)、狂言(3)、琵琶楽(5)、説経節

表-1 発声者一覧

ジャンル	発声者	ジャンル	発声者
〈邦楽〉		■長 唄	38. 東音 富田哲男
■古代・中世歌謡	1. 豊 英秋(宮内庁楽師)	■常磐津節	39. 常磐津一巴大夫
■祝 詞	2. 浅川 肇(談山神社)	■清元節	40. 清元美寿大夫
■声 明	3. 天納傳中/天台宗(実光院)	■新 内	41. 新内伸三郎
	4. 孤嶋由昌/真言宗(金蔵院)	■小 唄	42. 春日とよ子
	5. 和田友伸/真言宗(西南院)	■端唄・俗曲	43. 今藤長都美
	6. 松久保秀胤/法相宗(薬師寺)	■浪 曲	44. 春野百合子
	7. 大谷演慧/真宗(東本願寺)	■詩 吟	45. 野田雅詠
	8. 早水日秀/日蓮宗(本妙院)	■民 謡	46. 鎌田英一
	9. 榑崎通元/曹洞宗(瑞応寺)		47. 伊藤多喜雄
	10. 上見有二/黄檗宗(萬福寺)		48. 上木秋徳/「越中おわら節」
■能	11. 観世鎮之丞/観世流(方) (故人)		49. 富川順二/「越中おわら節」
	12. 粟谷菊生/喜多流(方)		50. 武下和平/奄美民謡
	13. 宝生 閑/宝生流(方)		51. 照喜名朝一/琉球古典
■狂 言	14. 茂山千作/大蔵流	■木遣歌	52. 西 禎康(長野「御柱」)
	15. 茂山千之丞/大蔵流	■警女唄	53. 小林ハル(最後の警女) ◆
	16. 野村 萬(万蔵改メ)/和泉流	■イタコ	54. 中村タケ(恐山)(◆:無響室非使用)
■琵琶楽	17. 永田法順/盲僧琵琶	■演 歌	55. 牧村三枝子
	18. 今井 勉/平家琵琶(平曲)	■ポピュラー	56. 渡辺真知子
	19. 森中志水/薩摩琵琶	■落 語	57. 桂 米朝
	20. 山崎旭翠/筑前琵琶	■新劇/朗読	58. 西山辰夫
	21. 奥村旭翠/筑前琵琶	■アナウンサー	59. 森本健成/NHK
■説経節	22. 若松武蔵大掾 (故人)		60. 中川 緑/NHK
■歌舞伎	23. 中村鷹治郎/上方	〈洋楽〉	
	24. 片岡秀太郎/上方(女方)	■ソプラノ	61. 玉井裕子
	25. 中村富士郎/江戸		62. 日比啓子
	26. 坂東三津五郎(八十助改メ)/江戸		63. 釜洞祐子
	27. 中村芝翫/江戸(女方)	■メゾ・ソプラノ	64. 青山恵子
■義太夫節	28. 竹本住大夫		65. 青木道子
	29. 豊竹嶋大夫	■アルト	66. 三谷亜矢
■地歌・生田流・ 箏曲	30. 菊原初子/野川流	■テノール	67. 神田詩朗
	31. 菊原光治/野川流		68. 鈴木寛一
	32. 藤井久仁江/九州系		69. 佐野成宏
	33. 高橋 要/柳川流	■バリトン	70. 三原 剛
	34. 林 美恵子/柳川流		71. 澗脇和範
■山田流箏曲	35. 室岡松孝		72. 高橋啓三(バス・バリトン)
	36. 平井澄子		
■一中節	37. 宇治紫文		
		計: 72名(邦楽60名/洋楽12名, 男声51名/女声21名)	

(1)、歌舞伎(5)、義太夫節(2)、地歌・生田流箏曲(5)、山田流箏曲(2)、一中節、長唄、常磐津節、清元節、新内、小唄、端唄・俗曲、浪曲、詩吟(各1)、民謡(6)、木遣歌、瞽女唄、イタコ、演歌、ポピュラー、落語、新劇・朗読(各1)、アナウンサー(2)。

/洋楽/ ソプラノ(3)、メゾ・ソプラノ(2)、アルト(1)、テノール(3)、バリトン(3)。

(合計 72 名：男声 51 名／女声 21 名)

4. おわりに

本稿では、収録した共通詞の“うたい分け”の音声試料について紹介した。

今回の収録を通して、洋楽においては、「日本語」のニュアンスをいかに伝えるかの葛藤を、そして邦楽においては、邦楽全体の地盤沈下への、また、「伝統」が失われつつある現状（“洋楽の発声法でうたってしまう”“音の微妙な高さの変化が表現できなくて、全て全音と半音でうたってしまう”、等）への演者たちの危機感を痛感した。

音声試料は近日中に公開予定（CD15 枚組）であり、本試料がこれらの諸問題への解決のために、また、誠に遅ればせながら 2002 年度からスタートする、学校教育（中・高等学校）における「邦楽」の授業での『声のテキスト』として、更にまた、学術研究での「日本語の歌唱」に関する「音声データ・ベース」構築のお役に立ち得れば、望外の幸せである。

最後に、発声者各位、並びに三味線等でご協力いただいた演奏家諸氏に深謝するとともに、お声をいただきながら既に亡くなられた若松武蔵大掾師（説経節）、観世鍊之巫師

（観世流シテ方）のご冥福を心よりお祈り申し上げます。なお、本研究の一部は文部省科研費補助金（No.12680289）、並びにトヨタ財団、サントリー文化財団、及び大阪芸術大学からの研究助成を得て行われた。

参考文献

- [1] 中山一郎, "伝統芸能における日本語音声の音響的特徴 — 洋楽の歌唱との比較研究 —," 文部省科研費・重点領域研究『日本語音声』（研究代表者・杉藤美代子）・平成 2 年度研究成果報告書(1991).
- [2] 中山一郎（編集・制作）, CD『邦楽と洋楽の歌唱』, 文部省科研費・重点領域研究『日本語音声』・平成 4 年度音声データ・ベース(1992).
- [3] 中山一郎, "邦楽と洋楽の歌唱はどう違うか？," 日本音響学会誌 55(5), 343-348 (2000).
- [4] 青山恵子, "日本歌曲における歌唱法の実践的研究 — 伝統芸能音楽との接点、その考察と実践論 —," 東京芸術大学博士論文(1987).
- [5] N. Kobayashi and Y. Tohkura, "Acoustics and physiological characteristics of traditional singing in Japan, Proc. of 1st. Int. Conf. on Music Percep. and Cognit. KB1-3 Kyoto, 171-174 (1989).
- [6] 中山一郎, 小林範子, "歌の声 — 声質の魅力と問題点 —," 日本音響学会誌 52, 383-388 (1996).